

# 柔道事故 —武道の必修化は何をもたらすのか— (学校安全の死角 (4))

内田 良

学校教育講座

## Judo Accidents at School: Risk of Budo as a Compulsory Subject (Blind Spots of School Safety 4)

Ryo UCHIDA

Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### 1 課題の設定

#### 1.1 学校安全と柔道事故

柔道部の練習中, 頭打ち中1死亡 青森 (『朝日新聞』2009年5月27日, 夕刊 [事例ID: j106])
姫路・高2, 部活中に倒れ死亡 柔道, 1人で受け身 (『朝日新聞』2009年7月27日, 朝刊 [事例ID: j107])
愛荘・泰荘中の柔道部員死亡 練習中に意識不明, 入院 (『読売新聞』2009年8月25日, 大阪朝刊 [事例ID: j108])

2009年5月から8月にかけて, 学校で柔道の練習中に, 3人の生徒が相次いで命を落とした。

2012年から, 中学校では武道が必修化される。必修化とは字義通りに考えれば, 「選択から必修へ」の移行である。しかしそれは, 別の角度からみると, 「一部から全員へ」の移行と理解できる。すなわち, 上記のような死亡事故を引き起こしうる柔道という競技に, これまでとは比にならない大多数の生徒が参加するということである。

死の危険がおおいに予測されうるにもかかわらず, 学校管理下における柔道の事故事例に関する包括的な資料は見当たらない。逆に言えば, だからこそ柔道中の事故は見過ごされてきたのである。柔道とはどのような意味で危険であるのか。そして, 武道必修化の時代とはいったい何を帰結することになるのか。

2001年6月に大阪教育大学附属池田小学校で起きた

児童殺傷事件以降, 「不審者」に対する不安が高まるなかで, 「防犯」が「学校安全」の代名詞であるかのように位置づけられることがしばしばある。私たちは「不審者」の恐怖に日々怯えているが, はたして意識をそこにだけ集中してよいのだろうか。私たちは, 劇的な事故や事件に目を奪われてはいないだろうか。

資源(ヒト・モノ・カネ)が溢れていれば, 手当たり次第に, 安全対策を施せばよい。しかし, 資源は有限である。限りある資源のなかで, より効率的により確実に事故を防がなければならない。このとき, 「事故件数の多さ」と「事故防止の可能性(事故発生状況の限定性)」は, 事故防止の資源配分にとって基礎とされるべき重要な情報となる。第3節で示すように, 学校管理下における柔道の活動では, 毎年のように死亡事故が発生している。さらにその発生状況・発生機序は限られており, 焦点を絞った防止策が検討可能である。それにもかかわらず, 学校安全の分野では, 柔道事故への関心は, きわめて低い。そして, 武道必修化の流れのなかでも, 危機感はいっこうに顕在化してこない。

武道が必修化し, 多くの生徒が柔道を経験するであろうこの時代において, 柔道の危険性に対する無関心を放置するわけにはいかない。緊急に柔道事故の分析と安全対策の検討が必要である。あるいは, 資源配分に限界があるために, 柔道事故を放置せざるをえないのであれば, 必修化そのものを考え直すという選択肢もありえよう。いずれにせよ, 柔道は死に直結しやすい運動であるからには, 柔道事故の実態を調べ上げ, その危険性について考察することが, 何よりもまず最優先されるべき課題である。

## 1. 2 本稿の目的

本稿の目的は、学校管理下における柔道の活動（体育や部活動）で発生してきた事故の実態とその危険性を明らかにすることである。

武道の必修化は、その導入に向けて「武道のよさ」（文部科学省 2007）が強調されてきた。しかし「よさ」が注目されているいっぽうで、武道という競技特有の「危険」についてはほとんど見過ごされている。とりわけ本稿が焦点化する、柔道活動中の事故、なかでもそのもっとも重篤な事態である死亡事故については、まったくといっていいほど言及や分析がなされていない。とはいえ、あらゆる活動に死はつきものである。その意味では、死亡事例が起きているということだけで、柔道事故を積極的にとりあげる理由にはならない。では、なぜ本稿は柔道に着目するのか。その理由は次の2つである。

- ① 死亡事故等の重大な事故が起きやすく（＝「事故件数の多さ」）、それは柔道特有の動作に起因している（＝「事故防止の可能性（事故発生状況の限定性）」）。
- ② 武道の必修化にともない柔道参加者が大幅に増加する。

①の理由である、重大な事故が起きやすいということは、②の問題と密接に絡んでいる。つまり、柔道に従事する人数が増加すれば、それに比例して重大事故の件数が増加する。新学習指導要領の完全実施（中学校では2012年度から）を前に、柔道の事故に対して注意を喚起し、事故防止への動きを活性化させることが、緊急に求められなければならない。

なお、本稿はこれまで筆者が論文として毎年発表してきた「学校安全の死角」シリーズの4本目である。このシリーズは、学校安全の今日的な方向性を相対化する試みである。今日の学校安全施策は、けっして事故の発生実態や防止可能性に応じて展開されているわけではない。諸々のプロセスを経て顕在化し、世間の耳目をひくようになった種の事故や事件に、施策は向かっている。それはつまり、資源（ヒト・モノ・カネ）の配分も当該事故に重点化されることを意味している。

いっぽう、資源は有限である。このとき、ある種の事故への資源配分は、それとは別の種の事故への資源配分をおこなわないことになる。ある事故・事件に関心を寄せるということは、それ以外のことに無関心になるということである。その関心と無関心の境界に合理的な理由はあるのか。本稿の知見は、その境界の妥当性・正当性を、批判し問い直すことになるであろう。

## 2 武道必修化により何が変わるのか

### 2. 1 武道の必修化

2008年度改訂の新学習指導要領により、中学校では保健体育の標準授業時数が90単位時間から105単位時間に増加する（2012年度完全実施）。保健体育における改訂のもっとも重要なポイントの一つに、武道の必修化がある。必修化とはすなわち、生徒すべてがその活動に参加するということである。

現行の学習指導要領（1998年度改訂）をみると、保健体育は、「体育分野」と「保健分野」から成り、「体育分野」には、8つの領域（体づくり運動／器械運動／陸上競技／水泳／球技／武道／ダンス／体育に関する知識）がある。武道の取り扱いについていうと、1年生では武道／ダンスの2つの領域から、2年生・3年生では球技／武道／ダンスの3つの領域からの選択とされている（なお学習指導要領では、武道の具体的な運動として、柔道・剣道・相撲の3つが指定されている<sup>1)</sup>）。これが新学習指導要領では、1年生・2年生では武道を含めた体育分野の8つの領域すべてが必修となる（3年生では球技／武道から1つ以上選択<sup>2)</sup>）。

前節で、柔道に着目する理由としてあげたように、「②武道の必修化にともない柔道参加者が大幅に増加する」ことが想定される。これはつまり、重篤な事態に直面しうる母数が劇的に増加することを意味する。事故に遭遇する確率が従来と同じであるならば、単純に、参加人数が増えれば、その分だけ事故に遭う人数が増えるのである。

### 2. 2 武道参加者の増加

武道は体育分野の一領域として重要な位置を占めてきた。戦後GHQの指導により戦時色を排するために一時的に中止されていた武道の授業は、1950年に復活して以来、1958年には中学校の学習指導要領で「格技」として男子の必修に位置づけられ、次第にその体育分野全体に占める比重を増していった。1989年には学習指導要領改訂にともない「格技」は「武道」という旧来の名称に変更された（直原 2009）。またこのとき、「武道およびダンスの領域については、男女とも選択して履修できる」ことが定められ、さらに男女共修への道も開かれた（熊安 2000）。これが今回の改訂で、「武道」と「ダンス」は選択ではなく、生徒全員の必修（1・2年生）となる。そして、ここで押さえておきたいのは、必修化によって、中学校時代に柔道の授業を経験する生徒が劇的に増加するということである。

第一に、中学1年生とさらに2年生でも必修とされることで、武道への参加者は必然的に増える。文部科学省は、「中学校武道の必修化に向けた条件整備」「指導者の養成・確保」「武道場の整備」「武道用具等の整備」に予算を計上（文部科学省 2009）してお

り、こうした条件整備は、いっそう武道の実施を促進し、参加生徒数の増大をもたらすと予測される。

そして第二に、女子の参加が見込まれる。武道が男子の必修から男女の選択とされたとき、それは必ずしも武道と男子生徒との結びつきを解体したわけではなかった。学習指導要領では男女いずれも「選択」とされているが、実質的には「隠れたカリキュラム」のもとで男女それぞれが「選択」する領域は固定化されていたといえる<sup>3</sup>。そこには、女子≒ダンス、男子≒武道の実態があった。それゆえ今回の必修化は、中学1年生・2年生の女子生徒すべてを武道に参加させ、武道経験者の大幅な増加を引き起こすことになる。

### 2.3 武道の時間数

新学習指導要領では、時間数については、保健体育全体では90単位から105単位へと増加したが、8領域すべてが必修となったことから、その増分だけ各領域の単位時間数が増加するとは考えにくい。柔道でいえば、現行の学習指導要領の場合も、新しいその場合も、各校ではおおむね1年間で13～15単位時間が割り当てられると考えられている（浅野 2008、文部科学省 2007、本村 2003）。

武道には柔道・剣道・相撲があり、体育活動に限っていうと、全国的には柔道の実施率が高い。たとえば神奈川県の中学校では1997年度の時点で武道の実施率が91.5%、うち柔道69.1%、剣道28.3%、その他3.9%（種目の重複あり）である（吉村他 1997）。宮城県の公立中学校では1996年度の時点で武道の実施率が96%、うち柔道76%、剣道34%、相撲1%（種目の重複あり）（斎藤他 1999）。愛媛県では2008年度時点で公立中学校（中等教育学校を含む）における武道種目の実施状況は、柔道62%、剣道28%、相撲8%、その他2%となっている（越智他 2009）。これらの調査結果を集約すると、武道を実施している中学校では、柔道が約6～7割、剣道が2～3割の実施率といえる。必修化の時代に、これまでダンスを履修していた女子が、かりに上記の割合のとおりには武道を履修するならば、武道のなかでは柔道への参加者がもっとも多くなると予想される。ただし、剣道が「武道種目の中では、女性教員が取り組みやすい種目であると考えられる」（越智他 2009）ならば、今後は剣道の実施率が若干高まることも推測される。

いずれにしても、武道の必修化は、女子生徒の新たな参加を含めて、柔道を履修する生徒数を実数のレベルで格段に増加させる。もし柔道が、武道のなかであるいは体育競技のなかでとりわけ重大な事故に結びつきやすい運動であるとすれば、この事態は、けっして静観するわけにはいかない。以下、柔道という運動が、他の運動と比較して、どのような事態を帰結しやすいのか、明らかにしたい。

## 3 柔道に起因する重大な事故

### 3.1 柔道活動中の死亡事故

前節では、「②武道の必修化にともない柔道参加者が大幅に増加する」ことを明らかにした。次に、「①死亡事故等の重大な事故が起きやすく（＝「事故件数の多さ」）、それは柔道特有の動作に起因している（＝「事故防止の可能性（事故発生状況の限定性）」）」ことについて、具体的な事故事例と、その件数（人数）ならびに発生率をもとに、分析したい。

冒頭であげたように、2009年の5月から8月にかけて、柔道活動中の死亡事故が3件発生した。こうした死亡事故は、学校管理下において毎年発生している。そこで以下、学校管理下において発生した、柔道活動中の事故、とくに柔道特有の動作（技）に起因する死亡事故に着目し、事故の実態に迫ってみたい。この作業は、武道の必修化にともない柔道参加者が劇的に増加するだけに、重要な意義をもつものである。

武道の事故事例について本稿が参照するのは、日本スポーツ振興センター発行の『学校の管理下の死亡・障害事例と事項防止の留意点』（以下、『死亡・障害事例』）である。日本スポーツ振興センターは、義務教育諸学校、高等学校、高等専門学校、幼稚園および保育所の管理下における災害（負傷、疾病、障害または死亡）に対し、災害共済給付（医療費、障害見舞金または死亡見舞金）をおこなっている。そこで把握された死亡・障害の事故を紹介したのが『死亡・障害事例』であり、これは一部の年度を除いて毎年発行されている（『死亡・障害事例』の正式のタイトルならびにそこに記載されている事例数や事例の発生年度については、表1を参照）。

そこで、昭和60年版～平成20年版（記載事例の発生年度：昭和58年度～平成19年度（1983年度～2007年度））に記載された25年間の死亡事例すべてに目を通し、柔道事故の死亡事例を拾い上げた（後に示す表2・表3では、新聞記事をもとに2008・2009年度の事故事例も含めている）。なお、共済給付制度への加入率は、25年間一貫しておおむね97%前後で推移している。したがって、『死亡・障害事例』が対象とするのは、学校に通うほとんどすべての子どもとみてよい。

一般に、死亡に関するデータは客観性が高い、つまり、実態レベルで起きていることが数値に適確に反映されると考えられている。たとえば、刑法犯の認知件数のうち殺人のそれは、暗数（公式の統計にはあがってこない隠れた件数）が小さく、発生件数をほぼあらわしているとみなされる（河合 2004、浜井 2006）。また、リスク研究の分野でも、人が受ける損害にはさまざまな程度があるものの、そのなかで「もっとも避けたい事態」である「死」は、リスクの「エンドポイント」とよばれ、客観的に扱える指標として利用されて

いる(中西 2004)。同様の理由から、本稿の柔道事故の死亡事例もまた、暗数の幅はほとんどなく、ほぼ確実に実態を映し出していると理解したい。

『死亡・障害事例』に記載されている限りの事例に関して、1983年度以降における柔道の死亡事例は表2のとおりである(参考までに、剣道の死亡事例を表3に示した)。表2左側の「事例ID」は全事例の通し番号である。全部で、108件の死亡事故が起きていることがわかる。ただし、事例IDのj001～j104は『死亡・障害事例』をもとに、j105～j108は新聞各紙の情報をもとに拾い上げた事故である。「体育／部活」については、事故が発生したときに体育の授業中であったのか、部活動(課外活動)中であったのかを示している。表には、柔道の運動に関連して起きたすべての種の死亡事故が掲載されている。柔道に固有の動作(投げ技や固め技)による事故にくわえて、通常の運動において生じるような突然死や熱中症も含まれている。前者については、「柔道固有の事故」の列に「○」と表記し、後者の場合には死因等を書き込んだ。

基本的な知見についておさえておこう。柔道中の死亡事故は、年平均4.0件(108件/27年間)発生している。男女比は、男子が95.4%(103人)、女子が4.6%(5人)で、男子が圧倒的に多い。学年別人数比は、中1が17.6%(19人)、中2が13.0%(14人)、中3が2.8%(3人)、高1が42.6%(46人)、高2が18.5%(20人)、高3が5.6%(6人)となっており、中高それぞれ初年時(中1ならびに高1)が高く、とくに高1での発生率が高い。体育と部活については、体育が13.0%(14人)、部活動が87.0%(94人)となっている。柔道固有の動作(投げ技や固め技)による死亡が72.2%(78人)、その他の理由(心不全や熱中症等)による死亡が21.3%(23人)、不明が6.5%(7人)である。

ここで注目したいのは、柔道固有の動作が死に直結している点である。とくに投げ技の衝撃による死亡事例が目立つ。本稿冒頭の3件の事例(事例ID:j106, j107, j108)は、いずれも投げ技・受け身の失敗に起因している。つまり、柔道の死亡事故というのは、その発生状況・発生機序が特異的であると同時に限定的である。限定的であるということは、そこに焦点を絞って、安全対策を模索することができる。柔道競技の専門家による積極的な検討が期待されよう<sup>4</sup>。

ところで受け身の衝撃に関する、興味深い研究がある。森藤らは、受け身の衝撃やその緩衝動作に関する先行研究が被験者を柔道有段者に限定してきたことを問題視し、熟練者群/未熟練者群/未経験者群の3群の被験者を用いて、受け身の衝撃を計測した(森藤他1990)。被験者は計16名であり、十分なサンプル数とは言い難いものの、その詳細な実験は次のことを明らかにした。第一に「着床時における最大衝撃力は、熟練者のほうが、未熟練者あるいは未経験者より有意に

小さかった」。そして第二に「受け身をとった際に、熟練者は、腕が先に着床するのに対し、未熟練者、未経験者は着床部位順序は一定ではなかった」(森藤他1990:93)。つまり未熟練者や未経験者は、着床時に腕を鞭のように作用させて衝撃を減殺することができず、それが着床時の衝撃を大きくしているといえる。

武道必修化の時代とは、「一部から全員へ」の時代である。その「全員」の多くが、未熟練者であり未経験者である。そうした生徒たちが多く柔道の活動に参加する。投げる側もそして受ける側も、十分な技能をもちあわせていないままに投げ技へと入ってしまうと、そこには大きな危険が待ち受けているのである。

### 3. 2 各部活動における死亡事故の発生率

柔道活動中の死亡事故は、毎年起きている。しかしながら、死亡事故が発生しているのは、柔道だけではない。あらゆる活動に、危険はつきものである。そうであるとするならば、柔道が危険であるということの根拠はどこにあるのか。最後に、この疑問に答えるかたちで、柔道の危険性について考えてみたい。

そこで、柔道以外の運動種目について、部活動中の死亡事故件数を調べ、相互に比較しよう。本稿は、武道必修化を受けての問題提起であるという点では、体育授業中の死亡事故件数をもとにした比較検討がなされるべきであろう。しかし本稿ではデータ上の制約<sup>5</sup>から、部活動に限定した分析をもってその代替とした。

そもそも、部活動の死亡事故件数のみを比較するからといって、それは本稿の目的からはずれることにはならない。なぜなら、本稿が問うているのは、柔道という運動に付随する危険であって、体育か部活動かは重要な意味をもたない。もちろん、体育と部活動とでは、運動のメニューは少なからず異なっているであろう。しかしその運動の特性は同じはずである。部活動中の事故の実態と発生率を知ることは、体育授業の安全対策に重要な示唆を与えてくれるはずである。

表4は、部活動のなかでも人気が高い種目について、2003年度から2007年度の5年間に発生した死亡事故の件数を整理したものである。表には、比較のうえで欠かすことのできない、部活動の参加生徒数が示されている<sup>6</sup>。参加生徒数は、関係する連盟が一括して調査し把握した値であり、信頼性・安定性が高い。

表4で注目したいのは、生徒「10万人あたりの死亡人数」である。中学校・高校いずれの場合も、「10万人あたりの死亡人数」は柔道が突出して高い。中学校では1.980人であり、次に高いバスケットボールの0.371人と比較しても5.3倍の多さになる。高校の場合も含めて、死亡人数そのものだけでは柔道をうまわっている種目があるものの、参加生徒数を考慮した比率計算からは、柔道は危険性がきわめて高い運動種目であ

ることがわかる。

繰り返しとなるが、武道必修化の時代とは、「一部から全員へ」の時代である。その「全員」がいま、もっとも危険な運動へと向かっている。柔道はその「よさ」以上に、まずもってその「危険性」を強調しなければならない。現実を直視したうえで、その危険性への対処を早急に検討する必要がある。

#### 4 結 語

熟達者ではない生徒たちが、専門的な経験や知識を十分に備えているわけではない教師のもとで、お互いを身体ごと投げ飛ばす。投げられた生徒は、ときに頭や首を下にして落ちていく。柔道の時間とは、学校生活のなかでもっとも危険な一瞬である。

しかしながら、学校安全の取り組みは、そうした重大な危険の実態を見逃したまま進められてきた。各種事故・事件が実証ベースで検討されることなく、劇的な事件や事故とそれに対する不安が学校安全の施策を方向づけている。本稿の副題にある「学校安全の死角」というのは、物理的な死角を指しているのではない。それは、意識レベルにおける死角のことである。事故データとともにさまざまな死角を暴きながら、限りある資源のなかで、私たちは学校安全を志向していかなければならない。

何かに関心をもつということは、何かについて無関心になるということである。関心と無関心の間の線引きを、確かな根拠をもって実行することができているか。不安に呼応する安全対策ではなく、データに呼応する安全対策が求められる。

#### 注

- 1 現行ならびに新学習指導要領（中学校）いずれにおいても、柔道、剣道、相撲の他に、地域や学校の実態に応じて、なぎなたなどのその他の武道についても履修させることができるとされている。
- 2 武道は、高等学校では、必修化されていない。また、厳密に言うところ、中学校で必修化とはいえないものの、中学校1年と2年それぞれで武道とダンスを必ず開講することは要請されていない。新学習指導要領の保健体育編解説には「領域の取上げ方の弾力化」として、「指導内容の確実な定着を図ることができるよう、第1学年及び第2学年においては、「体づくり運動」及び「体育理論」を除く領域は、いずれかの学年で取り上げ指導することもできる」とある。
- 3 たとえば、中村・浦井によると、2004年の東京都内の公立中学校651校（有効回答数306）を対象とした「ダンス」領域の実施状況調査では、ダンスを実施している学校が全体の80.7%（N=247校）であり、そのうち、クラス編成が女子別習で実施されているのが88.1%（N=557）、男子別習が0.5%（N=3）、共習クラスが11.4%となっている。ダンスは圧倒的に女子のみのクラスで実施されている（中村・浦井2005）。芹澤・田原は、2003年度実施の4県の国公私立中学校に対する調査から、学年別に運動種目ごとの授業開設状況を調べ、たとえば1年生のダンスについて女子別習で

40.6%（N=257）、男子別習で2.0%（N=12）、男女共習で31.2%（N=198）、1年生の武道については女子別習で4.4%（N=28）、男子別習で38.3%（N=243）、男女共習で30.8%（N=195）となっていることを明らかにした（芹澤・田原2005）。また、越智らも2008年度に愛媛県で実施した調査から、「ほとんどの学校で、男子が武道を女子がダンスを実施していた。男女とも武道が必修になることを考えれば、女子の指導に課題があることが分かった」と述べている（越智他2009:6）。

- 4 もっとも安価で容易な対策として考えられるのは、「禁じ技」の再検討である。現在、中学校では、蟹鉋、河津掛、足絨、胴絨が「禁じ技」に指定されている。「禁じ技」とまで名づけないにしても、中学1年の段階では、特定の投げ技については原則として指導禁止等の、一歩踏み込んだ内容が、学習指導要領に記載されてもよいのではないだろうか。
- 5 全国においてどの種目が何時間程度、体育の授業で実施されているかの統計資料は、管見の限り存在しない。危険性について柔道と他の運動との比較をするためには、その運動に参加している人数が分母に必要である。部活動についてはその情報がそろっている。
- 6 日本中学校体育連盟、全国高等学校体育連盟、日本高等学校野球連盟のウェブサイトより情報を入手した。URLは参考文献欄に記載した。

#### 参考文献

- 浅野哲男, 2008, 「新学習指導要領に基づいた中学校柔道授業計画」『武道』2008年7月特大号: 152-163.
- 浜井浩一編, 2006, 『犯罪統計入門——犯罪を科学する方法』日本評論社.
- 直原幹, 2009, 「体育科教育における今後の武道指導に関する考察」『上越教育大学研究紀要』28: 235-242.
- 河合幹雄, 2004, 『安全神話崩壊のパラドックス——治安の法社会学』岩波書店.
- 熊安貴美江, 2000, 「体育・スポーツと性役割の再生産」亀田温子・館かおる編『学校をジェンダー・フリーに』明石書店, 99-125.
- 前瀬大吾, 2009, 「柔道授業の実践報告と必修化の課題」『武道』2009年4月特大号: 114-123.
- 文部科学省, 2007, 『柔道指導の手引き（二訂版）』。  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/jyujitsu/07121717.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/07121717.htm)  
 [最終アクセス日: 2009年9月6日]
- , 2009, 「中学校武道の必修化に向けた条件整備」。  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/jyujitsu/1221058](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1221058) [最終アクセス日: 2009年9月6日]
- 森藤才・貝瀬輝夫・菅原正明・高瀬博・若林眞・小宮徳健, 1990, 「柔道における受け身の着床衝撃に関する研究」『東京学芸大学紀要 第5部門』42: 87-94.
- 本村清人編, 2003, 『新しい柔道の授業づくり』大修館書店.
- 中西準子, 2004, 『環境リスク学——不安の海の羅針盤』日本評論社.
- 日本中学校体育連盟, 2005, 「平成17年度 部活動調査集計」。  
<http://www18.ocn.ne.jp/~njpa/sub/h17bukatsu.html> [最終アクセス日: 2009年9月6日]
- 日本高等学校野球連盟, 2005, 「平成17年（2005年）度加盟校部員数・硬式」。  
<http://www.jhbf.or.jp/data/statistical/koushiki/2005.html> [最終アクセス日: 2009年9月6日]

越智克昌・越智誠二・森由紀, 2009, 「中学校における武道の指導方法及び指導体制についての調査・研究」『愛媛県総合教育センター 教育研究紀要』75: 5-8.  
 (http://www.esnet.ed.jp/center/csupload/uploads/H20\_1-2.pdf [最終アクセス日: 2009年9月6日])  
 中村恭子・浦井孝夫, 2005, 「中学校における体育の種目選択制に関する研究——ダンス領域を中心とした現状と問題点」『順天堂大学スポーツ健康科学研究』9: 52-56.  
 斎藤浩二・竹田隆一・黒須憲, 1999, 「宮城県中学校・高等学校の教科体育における武道の実態」『仙台大学紀要』31(1): 6-14.  
 芹澤康子・田原淳子, 2005, 「ジェンダーの視点からみた中学校保健体育のカリキュラム構成と授業の実施形態」『中京女子大学研究紀要』39: 69-77.  
 内田良, 2007, 「転落事故——学校安全の死角」『愛知教育大学研究報告(教育科学編)』56: 165-74.  
 ———, 2008, 「危険な校外学習——学校安全の死角(2)」

『愛知教育大学研究報告(教育科学編)』57: 49-57.  
 ———, 2009, 「耐震化時代の転落事故——ひさし・天窓の死亡・障害事例とその対策(学校安全の死角(3))」『愛知教育大学研究報告(教育科学編)』58: 141-151.  
 吉村哲男・金木悟・大塚真由美・笹木春光・網代忠宏, 1997, 「学校教育における剣道教育の実施状況についての調査報告——神奈川県内の中学校・高等学校を対象として」『東海大学紀要(体育学部)』27: 61-69.  
 全国高等学校体育連盟, 2005, 「平成17年度加盟登録状況」.  
 (http://www.zen-koutairen.com/f\_regist.html [最終アクセス日: 2009年9月6日])

※ 柔道事故の資料収集・整理においては、愛知教育大学教育学部4年生の吉川梨紗さんには多大なご尽力をいただきました。ここに記して、お礼申し上げます。  
 (2009年9月17日受理)

表1 『死亡・障害事例』の年度と事例数

『死亡・障害事例』の年度 〔～年版〕	記載事例の 発生年度	死亡の 記載事例数	『死亡・障害事例』の正式の著者・書名
昭和60	昭和58	261/429	日本学校健康会, 1985, 『学校での事故の事例と防止の留意点 一死亡・障害一〔昭和60年版〕』。
61	59	234/394	日本学校健康会, 1986, 『学校での事故の事例と防止の留意点 一死亡・障害一〔昭和61年版〕』。
62	60	234/383	日本体育・学校健康センター, 1987, 『学校での事故の事例と防止の留意点 一死亡・障害一〔昭和62年版〕』。
63	61	350	日本体育・学校健康センター, 1988, 『学校の管理下の死亡・障害〔昭和63年版〕』。
平成1	62	379	日本体育・学校健康センター, 1990, 『学校の管理下の死亡・障害〔平成元年版〕』。
2	63	333	日本体育・学校健康センター, 1991, 『学校の管理下の死亡・障害〔平成2年版〕』。
3	平成1	307	日本体育・学校健康センター, 1991, 『学校の管理下の死亡・障害〔平成3年版〕』。
4	2	307	日本体育・学校健康センター, 1992, 『学校の管理下の死亡・障害〔平成4年版〕』。
5	3	341	日本体育・学校健康センター, 1993, 『学校の管理下の死亡・障害〔平成5年版〕』。
6	4	320	日本体育・学校健康センター, 1994, 『学校の管理下の死亡・障害〔平成6年版〕』。
7	5	282	日本体育・学校健康センター, 1996, 『学校の管理下の死亡・障害〔平成7年版〕』。
8	6	279	日本体育・学校健康センター, 1997, 『学校の管理下の死亡・障害〔平成8年版〕』。
9	7	272	日本体育・学校健康センター, 1998, 『学校の管理下の死亡・障害〔平成9年版〕』。
10	8	241	日本体育・学校健康センター, 1999, 『学校の管理下の死亡・障害〔平成10年版〕』。
11	9	281	日本体育・学校健康センター, 2000, 『学校の管理下の死亡・障害〔平成11年版〕』。
12	10	225	日本体育・学校健康センター, 2001, 『学校の管理下の死亡・障害事例集〔平成12年版〕』。
13	11	281/726	日本スポーツ振興センター, 2002, 『学校の管理下の死亡・障害事例と事故防止の留意点〔平成13年版〕』。
14	12		
(15)	発行なし	207	日本スポーツ振興センター, 2003, 『学校の管理下の死亡・障害事例と事故防止の留意点〔平成14年版〕』。
16	14	174	日本スポーツ振興センター, 2005, 『学校の管理下の死亡・障害事例と事故防止の留意点〔平成16年版〕』。
17	15	189	
18	16	144	日本スポーツ振興センター, 2006, 『学校の管理下の死亡・障害事例と事故防止の留意点〔平成17年版〕』。
19	17	137	日本スポーツ振興センター, 2007, 『学校の管理下の死亡・障害事例と事故防止の留意点〔平成18年版〕』。
20	18	119	日本スポーツ振興センター, 2008, 『学校の管理下の死亡・障害事例と事故防止の留意点〔平成19年版〕』。
	19	125	日本スポーツ振興センター, 2009, 『学校の管理下の死亡・障害事例と事故防止の留意点〔平成20年版〕』。

※平成15年版は発行なし。

※『死亡の記載事例数』については、全事例記載の場合はそのまま整数表記し、事例が選択されている場合は「記載事例/全事例」とした。

表4 部活動で発生した死亡事故の事例数(生徒数)と発生率(生徒10万人あたり)

(2003年度～2007年度発生分)

		陸上	野球	バレー ボール	バスケット ボール	卓球	柔道	剣道
中学校	a: 死亡人数 (2003～2007年度の5年間)	1	5	1	6	2	5	0
	b: 部活動参加生徒数 (2005年度の中1～中3)	181408	296412	257068	323379	255405	50502	108551
	c: 10万人あたりの死亡人数 (=(a/5b)*100,000)	0.110	0.337	0.078	0.371	0.157	1.980	0
高校	a: 死亡人数 (2003～2007年度の5年間)	4	8	5	6	0	5	4
	b: 部活動参加生徒数 (2005年度の中1～中3)	88620	165293	122329	158350	71739	35120	56918
	c: 10万人あたりの死亡人数 (=(a/5b)*100,000)	0.903	0.968	0.817	0.758	0	2.847	1.406

※2003年度から2007年度における部活動の参加生徒数は、日本中学校体育連盟・全国高等学校体育連盟・日本高等学校野球連盟がそれぞれに公表している。2005(平成17)年度における部活動別の加盟生徒数を利用した。

※中学校の「野球」は、「軟式野球」である。

※突然死等の疾病による死亡を含む。

※表3の剣道中の事故に関して、事例IDのk028は、剣道の活動との直接的な関係性が小さいので、発生率の算出にあたっては、死亡人数に含めないこととした。

表2 柔道中の死亡事故

事例ID	『死亡・障害事例』年度 〔～年度版〕	事故発生年度	学年	性	体育/部活	死因	事故の概要	柔道固有の事故
j001	1985 (昭和60)	1983 (昭和58)	高2	男	部活	急性心臓病	技をかけられ倒れたとき。	心臓系
j002			高2	男	部活	腸間膜血栓症	柔道乱取中。	○
j003			高1	男	部活	急性硬膜下血腫	〔後方受身の際頭部を打つ〕 柔道部の練習が開始され、準備運動、補強運動後、受身練習に入った。本生徒は、横受身後、後方受けを行い、しゃがんだ姿勢からの後方受身を行った際腰に後頭部を打ち、その後の休憩時に気持ちが悪くなって、武道館の外に出て休んでいたが、吐いてうずくまっているところを3年生に見えられた。救急車の出動を要請、病院へ移送後手術を受けるも2日後に死亡した。	○
j004			中2	男	部活	心及び呼吸停止、脳挫傷	〔受身の際、後頭部を打つ〕 当日は、柔道部の練習が体育館横の校庭に畳を敷き行われた。本生徒は、練習中、大外刈りを受けられおむけに倒れて後頭部を打ち、事故後、自力で立ち上がったが、ふらついたので、体育館横の犬走りに寝かせ、水に濡らしたタオルを頭に当てて様子を見ていたが、部活動を巡視中の教頭の指示により校医に受診、更に、救急車で外科医へ運び、手術が行われたが、翌朝死亡した。	○
j005			中1	男	部活	急性硬膜下血腫	〔練習中倒れる〕 中体連主催による柔道大会終了後、大会参加の学校の合同練習が行われた。2、3年生は打ち込み、乱取りが約40分間行われ、その後2、3年生が各校の1年生を相手に受身をとりさせる約束練習を行った。本生徒は、順番に使い1人10回ずつを3人分ぐら行った後、4人目の3年生に足がもつれるので待つてくれるよう頼み場外で待たされた。その後の整理運動には参加した。午後3時10分から自校の生徒のみで練習開始、小内刈りに対する受身をさせたが、うまくないので3人目のとき監督が外れているよう指示したところ、返事をし3m程歩いて床へ倒れるように倒れた。直ちに練習を中止し、容態を見て救急車を依頼し、入院。手術が行われたが、死亡した。	○
j006	1986 (昭和61)	1984 (昭和59)	中2	男	体育	閉塞性心筋炎	柔道乱取り後。	○
j007			中2	男	部活	窒息死(推定)	寝技の練習中。	○
j008			高1	男	体育	脳硬膜下出血	受身の練習中。	○
j009			高1	男	体育	急性心不全	柔道の受身練習後。	○
j010			高2	男	部活	頚蓋骨折 (注)司法解剖の結果により突然死として扱う	練習終了後の整理体操中。	不明
j011			高1	男	体育	急性硬膜下血腫	〔受身の際、後頭部を打つ〕 当日は、柔道の指導部当時間の18時間のうちの6時間目に当たっていた。準備体操、補強運動後、午後2時30分から約束練習(体落とし)を実施した。最初本生徒が相手を投げる練習をし、休憩後、本生徒が投げられる側となり、50回の約束練習を行い、練習中背中から落ちて頭を打った。少し痛そうなお顔したが、そのまま練習は続いた。終了後、全員仰向けになって畳の上に寝こんで休憩をとった。体力が回復した頃、背負い投げの約束練習をするため全員が立ち始めたが、本生徒は立ち上がれないで、急に視点が定まらない目となり、手がぐらぐらした。教師の指示により救急車の手配がされた。その直後嘔吐し始め、意識がなくなった。救急車で病院に運ばれ、治療を受けたが、脳死、呼吸停止の状態のまま、意識は戻らず、5日後に死亡した。	○
j012			中2	男	部活	急性硬膜下血腫、脳挫傷	〔受身の際頭部を打つ〕 当日は、午後4時50分頃から練習が開始され、準備運動、受身、打ち込みを行った後、乱取りの練習に入り、本生徒は3年生Aと練習中、背負い投げで投げられたときに頭部を打ったが、約10分間休憩し、再び3年生Bと練習に入り、体落としで投げられたとき受身の姿勢が不十分のため頭から落ち、頭部をかきながら倒れて倒れた。倒れたときは痛かったが何ともないということで、整理運動、反省等を行い、午後6時20分頃練習を終了した。本生徒は、更衣後、水香場で何かを吐き出していたようだったが、友達に先に携帯のようにと言ったので、友達はそのまま下校した。その後、本生徒は教室に行き、午後6時50分頃、吐き気、頭痛を訴えているところを生徒に発見され、病院に移送、医師の診察後、他の病院へ移送中意識を失った。開頭手術が行われたが、意識が戻らないまま3日後に死亡した。	○
j013			高1	男	部活	急性硬膜下血腫	〔受身の際後頭部を打つ〕 8月8日から行われた柔道部合宿の2日目早朝トレーニングのあと8時30分から10時まで寝技練習、午後1時から4時30分までは立技練習が行われた。立技の自由練習中、本生徒は3分間の2本目に左大外刈りで投げられた際に左後部を強打した。直ちに様子を見たところ、意識不明の状態なので、救急車で病院へ移送、医師の指示により、転院入院、手術が行われたが、消化管出血、肺炎、肝機能障害を併発し、死亡した。	○
j014	1987 (昭和62)	1985 (昭和60)	中1	男	部活	脳挫傷	〔大外刈りを受けられ頭部を打つ〕 ランニング、準備体操の後、柔道の練習に入り、3年生5人にそれぞれ3・4名がついてかり稽古を行った。このとき本生徒は大外刈りを受けられ倒れたが、相手は本人の胸元を蹴したので、充分受け身ができず、左側頭部を打った。本生徒は痛かったので涙を流しながら、それでも次々とかり稽古の相手をしていったが、しばらくして「もういや」と言って休んでいたが、急に順番待ちの部員に抱きつくように倒れた。救急車で病院に移送したが、既に脳死の状態、およそ3週間人工呼吸で養生を図るも、ついに死亡した。	○
j015			高1	男	部活	急性硬膜下血腫	〔払い腰で投げられる〕 準備運動、補強運動、寝技の練習を約50分間行い、打ち込み、約束稽古を20分間行った。(なお、本生徒は入学後に柔道始めたが、入部後は順調に基礎的な技術向上を遂げ、毎日の練習にも充分順応していると見受けられた。)午後4時40分ごろから乱取り練習を開始。この練習は、相手を限定せず1一本を3分以内で行い、相互に相手を代えながら行うもので、本生徒は相手を二人交代し、ついで2年生(初段)と組み合い、お互い技をかけ1〜2分過ぎたとき、払い腰で投げられ二人が重なるように倒れた。このとき本生徒は頭部を強打したようである。すぐに立ち上がり、再び相手を代え練習を続けようとしたが、突然その場に倒れるように倒れた。直ちに救急車の出動を要請して病院に運ばれて血腫除去の手術を受けたが昏睡状態が続き、容態が急変して死亡した。	○
j016	1988 (昭和63)	1986 (昭和61)	高1	男	部活	低酸素性脳症	柔道部活動時、道場で打ち込み練習200本、約束練習60本、乱取りを10本(各4分)、元立ちの1分練習10本、4分試合練習3本を約2時間ほど行って一息つき、道場の壁に背をもちたてたところ、数分後、突然倒れた。救急病院へ運んだが、7日後死亡した。	不明
j017			高2	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、道場で約束練習を10本行った直後、頭をかかえて倒れ、意識を失った。救急病院へ移送し治療するが死亡した。なお原因は、約束練習で頭部を打ったためと推定される。	○
j018			高1	男	部活	脳腫脹	柔道部活動時、道場で乱取りげこの際、大内刈りを受けられ、後頭部を畳で打った。病院へ移送、治療を受けていたが、12日後、死亡した。	○
j019			中1	男	部活	急性脳腫脹	柔道部活動時、道場で新入部員同志で交互に投げる練習をしていたとき、受身に失敗して、数回頭部を打った。救急病院へ移送され治療を受けるが、翌日死亡した。	○
j020	1989 (平成1)	1987 (昭和62)	高1	男	部活	熱射病	柔道部活動夏季合宿の2日目、朝食後準備運動を開始し寝技、打ち込み(背負い型)100本を実施した。本生徒は、40〜50本行った頃から数回間違えたり、声が小さくなりしたが100本を終了した。しかし、その頃からしびれがみだり運動がおかしいので、異常を感じ救急車を手配し救命処置を行ったが翌朝病状が悪化して死亡した。	熱射病
j021			中2	男	部活	石硬膜下血腫	柔道部活動時、練習中乱取りの後、輩後に背負い投げをした時、本生徒は、受け身を起して起きようとしたが動けなくなった。頭を水タオルで冷やし、病院へ移送し手当を加えたが死亡した。	○
j022			中3	男	その他 (体育大会)	脳挫傷、左急性硬膜下血腫	体育大会の柔道大会に出場し試合中、大外刈りで本生徒は下になり場外へ倒れた。その時、肩から畳に落ちたが、板の間と畳の境目の木枠に後頭部を打ちつけた。外傷はなかったが試合が出来ないと訴えたので休ませた。突然、けいれんを起こしたので、容態が悪いと判断して病院へ移送したが昏睡状態が続き死亡した。	○
j023			高2	男	部活	頚蓋内出血、脳挫傷	柔道部活動時、背負い投げの練習中、相手を受けられた時、右側頭部より畳に落ちた。その後、練習を続けたが、しばらくして頭を両手でおさえ、ゆっくり前に倒れるようにしびれがみこみ意識不明となった。直ちに救急車を手配、病院に移送し手当を受けたが死亡した。	○
j024	1990 (平成2)	1988 (昭和63)	中1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、約束練習で、大外刈りを受けられ背中から落ちた。あいさしよとして立ち上がったが、うずくまるように倒れ、意識不明、ひきつけ、いびきをかく状態であった。救急車で近医へ移送し応急手当のあと、病院に移送、手術を受けるが翌日死亡。	○
j025			中2	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、背負い投げの練習で投げられたとき、本生徒は腰を引きながら体を十分に預けない状態になり、取り(投げられる側)の引き手と本生徒の受身が十分でなかったために、頭部を畳で強打した。救急車で病院へ移送し、手術したが1週間後死亡	○
j026			高1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、乱取りをしていて大内刈りを受けられ、おむけに倒れ後頭部を畳に打ちつけた。通常の投げられ方であり受け身がとれる程度のものであったが、本生徒はすぐ立ち上がり数歩歩いて前方に倒れこんだ。病院へ移送したが、脳死に近しい状態が続き7日後に死亡。	○
j027			高1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、試合形式で練習中、本生徒は大外刈りを受けられ尻から落ちてからおむけに倒れ頭を打ったが、再び組み合い場外へ、そして、開始線に戻り再開しようとしたとき、うめき声をあげ四つんばいに倒れ落ち、直後いびきをきはじめ意識不明となる。救急車で病院へ移送したが翌日死亡。	○
j028			高1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、準備運動、打ち込み、乱取りのあと、約束練習のさい、受け身を起した後に後頭部を打った。道場中央より数歩歩き量の外へ出たが、うずくまってしまったので静かに寝かせた。しかし意識が戻らず、救急車で病院へ移送、約11時間後に死亡	○
j029	1991 (平成3)	1989 (平成1)	高1	男	授業	脳挫傷	体育の柔道の補充授業中、試合形式で打ち込みを中心とした「順し」の練習をした。指導教師は本生徒を相手にして実技指導を行い、自腹本体の構えをとらせ、体を起こしながら回そうとしたが回りきらず、本生徒の体が指導教師の体に直線的にぶつかって来た0教師は、右脇下に本生徒の頭があったので支えることができず、ほぼ真後ろに倒れた。本生徒は教師をつかんだままだったので支えることができず、頭を打ちつけた。直ちに救急車を手配し、病院へ移送したが3日後死亡した。	○
j030			高2	男	部活	脳挫傷による心及び呼吸停止	柔道部の練習中、乱取り練習で相手内股を掛けられ、外されて返技で投げられ、畳面で頭を打ったと思われる。同様のことが2回あった。ミーティングに入り、途中で気分不良を訴えたので、休ませていたところ、間もなくおう吐して意識不明となり、救急車内で外科医の診断を受け、病院へ移送され手術を受けたが、意識が戻らぬまま1週間後死亡した。	○

柔道事故

j031		高2	男	部活	頭蓋内出血	高体連支部柔道大会団体戦中、本生徒は先鋒として出場、大外刈りを掛けられ後頭部を畳で強打した。その後自席に戻り正座して観戦していたが、片手を畳について前のめりに倒れ意識を失ったので救急車で病院へ移送、応急処置後転院。治療を受けたが3日後死亡した。	○	
j032		高2	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部の活動中、背負い投げの約束練習を行っていた際の生徒が体勢を崩し、受けであった本生徒は低い姿勢から畳に投げ出された格好となり、頭から落ち頭部を強打した。起き上がりかけて續けようとしたので教師が止めさせたが、しばらくして意識がなくなってきたので近くの専門医の診察を受け、その後、救急車で病院へ移送したが3日後に死亡した。	○	
j033		高1	男	部活	熱中症による急性心不全	柔道部の活動中、準備運動後、1周約400mのトラックを全員で5周、各自のペースで走った。その後ダッシュ練習に入り15m×8本、50m×6本、100m×4本、200m×2本、400m×1本を行った後、追い抜きダッシュを行い、1周目の終り付近で本生徒は足もたふらつき、うづくまようになり倒れ意識を失った。倒れた後、目を覚ませようと顔面に水を掛け、意識が戻った後格技場へ移し涼しいところに寝かせ、水を顔に冷やすなどの手当てをして回復を待ったが、倒れてから8時間後容体が急変、救急車で病院へ移送されたが死亡した。	心不全	
j034		高1	男	授業	急性心不全	体育の柔道の授業を終え、着替え終わって4階の教室に戻り、自分の席に座っていて、椅子から床に倒れ落ちた。すぐに人工呼吸等の処置を行い、救急車で病院へ移送したが死亡した。(既往症)心尖部肥大型の特発性心筋症(死亡の4か月前に心臓内科より心臓超音波検査等を実施して診断)	心不全	
j035		高1	男	部活	急性肺炎の疑い	柔道部の合宿中、本生徒は40℃の発熱があり、すぐに病院で受診、入院を希望したが、その必要なしとされ帰校し、その夜は合宿室で休ませた。翌朝も体調が思わしくなく、11時ごろ容体が急変し再度病院で受診、入院した。一時は快方に向かかと思われたが、血球のフィナーゼや呼吸器腫瘍等は入院時と変わらず、徐々に悪化、発熱が2日後の朝酷化を併発、悪化する容体が急変し死亡した。	肺炎	
j036	1992 (平成4)	1990 (平成2)	中1	部活	右急性硬膜下血腫	柔道部活動時、乱取り練習をしているとき、すでに道部の意見が固まっていた本生徒に対し、日頃より練習態度に敬意が欠ける様子を見てとっていた上級生を含む8人が、いつもよりやや厳しい掛け合いを実施。2人がかりで、大外刈りを掛けたとし、転倒し頭部を強打し意識不明となつたため、職員室の顧問に連絡、救急車で病院へ移送し、手術を受けたが死亡した。	○	
j037		中2	男	部活	脳挫傷	柔道部活動時、乱取りをしていて「体落とし」を掛けられた。そのとき、相手の体も倒れて巻き込まれたような状態になり左側頭部を畳で打った。直ちに、顧問教師が本生徒を安静にし声を掛けたところ「気持ちが悪い」と答え頭痛を訴えたため、救急車で病院へ移送し、手術を受けたが8日後死亡した。	○	
j038		高1	男	部活	急性硬膜下血腫、出血性	柔道部活動時、乱取りを行っていて、本生徒は横掛けで投げられ、右側頭部を強打し、顔にタオルを当てて休んでいたが(1-2分)、顧問に「頭を打ったので休ませて欲しい」と申し出たので、他の生徒と接触しないように道場の端へ寄せよとされたとき、足から倒れ落ちた。救急車で病院へ移送し、徐々に意識状態が悪化されたが、8日後死亡した。	○	
j039		高1	男	部活	急性硬膜下血腫、頭部打撲	柔道部活動時、乱取りを行っていて、体落としで投げられ後頭部を畳で打った。5分ほど休み、水を飲みトイレに行き入口で倒れた。顔を冷やしながら救急車を待ち、病院へ移送したが10日後死亡した。	○	
j040		高1	男	部活	脳挫傷	柔道部活動時、乱取りをしていて、内股が決まらず、本生徒の頭部を膝で挟み込んだまま両手で倒れ込んだ。その後立ち上がり、1本目の対戦が終わる。本生徒は、気分不良と吐き気を訴え、他の部員が付き添ってトイレに行き、吐き出すまで水で冷やしてうちを待たせながら救急車で病院へ移送したが、2日後死亡した。	○	
j041		高1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、同学年の相手に「大外刈り」を掛けられ、頭から畳に落ち頭部を強打した。すぐに起き上がり、畳の上に出て座って水で頭部を冷やしていたが急にその場に倒れるように倒れ込んだ。応急処置をして救急車で病院へ移送したが死亡した。	○	
j042		高1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時アイトレニングを顧問教師の指導のもと行い、大外刈りの練習を8回行った直後、気分不良、頭痛、吐き気を訴え、まもなく意識不明となり、救急車で医療センターへ移送したが2日後死亡した。	○	
j043	1993 (平成5)	1991 (平成3)	中2	男	部活	脳挫傷	柔道部の練習試合のため、他校へ行き練習していたところ、途中で気分不良を訴えたので、控室場所で行ったが、顧問教師が様子を見て行ったが、頭痛と気分不良を訴えていた。しばらくすると眠っていたので30分ほどそのまま寝かせておいたところ、朝醒めに目覚めたときに意識が戻らず、意識が戻らないうちに死亡した。	不明
j044		高1	男	部活	急性硬膜下血腫、くも膜下血腫	柔道部の練習でコート上のランニング、準備体操のあと、移動のときつり50本と移動の打ち込み200本を行った。本生徒は180本になったところで、顔を抱え込むようにしてかみこんだ。声をかけたところ「大丈夫」と答えた。顧問が叫ぶあふしながらも歩いていたが意識が戻らないうちに死亡した。	○	
j045		高1	男	部活	脳挫傷	柔道部の合同練習会を実施した。準備体操や基本動作練習のアップを行い、立ち技のみを主体とする乱取りをしていた際、相手から低い背負い投げを受け顔を打った。その時は「大丈夫です」という返事があったため、道場の隅で休まっていたとき、意識を失ったので救急車で病院へ移送し手術を受けたが翌朝死亡した。	○	
j046		高1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部の合宿4日目、新しい立ち技合宿が行われた。本生徒は他の部員より小柄の方であり投げられる方が多かった。この練習後、頭痛と寒気を訴えたが、その後は異常を訴えることなく過ごした。翌日は、早期練習に参加し朝食も食前に午前中の練習にも参加したが次第に元気がなくなり、腰に頭痛を訴え頭痛薬を飲み休んでいた。午後練習も参加したが、気分がすぐれずほとんど見守った。午後4時ごろ鼻出血をおこし倒れ、意識を失い救急車で病院へ移送し、開腹手術を受けたが経過観察の2日に死亡した。	○	
j047	1994 (平成6)	1992 (平成4)	高2	男	部活	急性循環不全	柔道部の午前中の練習を終えて、本生徒は水のみで水を飲み、洗顔をした後、格技場に戻るとしたとき、体がふらつき、足がついてきたためうづくまった。安静にして寝かせたが、けいれんを起こし、意識が朦朧として来たので、救急車で病院へ移送したが死亡した。	循環不全
j048		中1	男	部活	硬膜下出血	柔道部活動時、柔道場で準備練習を行い、前回り受身を行っている途中、本生徒は、友人に側頭部の痛みを訴えたが、教師には申し出ず、更にけさめめの練習前にも首が痺れたと友人に訴えたが申し出なかった。練習終了後、頭痛を申し出したので、準備運動が原因だと判断し、道場では事務室に同行したところ容体が急変した。父が自家用車で医師に移送、手術のため転院。手術を受けたが9日後に死亡した。	○	
j049		中1	男	部活	硬膜下出血	柔道部活動時、学校外の道場で準備運動、打ち込み、投げ込み、乱取りの後、足技、寝技等の練習を行った。終了時間となり整理体操を行おうとしたところ、本生徒が倒れるように倒れた。救急車で前立病院へ移送、更に県立病院へ転院し手術を受けたが、10日後に死亡した。	○	
j050		高1	男	部活	急性硬膜下血腫	鷹内運動場で柔道部活動時、本生徒は乱取りを行っていて、一本背負いを掛けられ受身を取った際、側頭部を強打した。いったんは立ち上がり、歩いて畳の積み上げであるところへ行き、しゃがみ込んだまま意識不明になった。救急車で病院へ移送したが2日後に死亡した。	○	
j051		高1	男	部活	呼吸不全	武道場で柔道部活動時、本生徒は乱取りを行っていて、大外刈りをかけられ、仰向けに倒れた後、後頭部を打った。直ぐに練習から外し、様子をを見たが、気分不良を訴えて横になり、意識不明となったので救急車で病院へ移送したが54日後に死亡した。	○	
j052		高2	男	部活	急性硬膜下血腫	夏休みの柔道部活動時、本生徒は柔道場で準備運動等で体をほぐした後、基本の打ち込みを計120本、約30分間行い、乱取りを8本行ったところで、気分不良を訴え、便所でおうじしたが再び練習に参加した。休憩時間に入ったとき、座り込んだまま前方に倒れ意識を失った。単車で隣接の大病院に運び、手術を受けたが、11日後死亡した。	○	
j053	1995 (平成7)	1993 (平成5)	高3	男	部活	脳浮腫(初診時病名:脱水症、熱中症、ショック)	柔道部活動で高等学校合同練習に参加中、本生徒は、予定の練習を終わった直後の午後4時過ぎ、気分の悪さを訴えて倒れたので、風通しのよい場所に移動し、水分を補給し様子を見ていたが、けいれんを起こしたため、救急車で病院へ移送、治療を受けたが7時間後に死亡した。	熱中症
j054		高1	男	部活	脳死、その原因:頭蓋内損傷、その原因:頭部への外力	柔道部の練習中、本生徒は、乱取りをしていて小外刈りを決められ、後頭部を強打した。技をかけた部員は倒れこむこともなく、本生徒に加重は全くかからなかった。直後は「大丈夫」と答えていたが、間もなく意識が薄れ始めた。応急処置を行い救急車で病院へ搬送、治療を受けたが11日後死亡した。(解剖所見)1.左硬膜下血腫、外傷性くも膜下出血、著明な脳浮腫、ヘルニア形成、脳死状態 2.左右気管支炎、膈膜腫瘍 3.後頭部の陳旧な表裏剥脱。	○	
j055		高2	男	部活	急性硬膜下血腫、その原因:頭部打撲	柔道部の練習中、本生徒は、顧問教師と対戦していて、小内刈りを掛けられ、右足を取られてのけ反るように後ろに倒れ、頭部を畳に打ちつけ、意識を失った。応急処置を行い救急車で病院へ移送、治療を受けたが、約1か月後に死亡した。(解剖所見)脳は腫脹し泥状化を呈す。頭蓋は開頭のため一部欠損、両肺気腫。	○	
j056		高2	男	部活	汎血管内凝固症候群、その原因:後腹膜腔出血、その原因:乳び胸	本生徒は、鷹内運動場で柔道部の練習中、乱取り練習をしていて、左組手から仕掛けられた体落としを助うとして半ば相手の腰に抱きつきながら左肩から落下し、左鎖骨を骨折した。応急処置後接骨院に移送、その後治療と診断されたが、体調がすぐらず、内科で受診したところ、特発性乳び胸と診断、更に外科に転科し外傷性乳び胸と診断され、入院・手術・治療を受けたが快方に向わず、骨折から約10か月後に死亡した。	○	
j057	1998 (平成8)	1994 (平成6)	中1	男	部活	急性硬膜下血腫、脳挫傷による脳脊髄痺	柔道部活動中、格技場で受け身練習後の打ち込み練習のとき、本生徒は、3年部員と組み、背負い投げを受けた際、右肩から畳に落ちた。数秒間じっとしていた後、中腰になったが「具合が悪い」と言って仰向けに倒れた。目は半開きで、いききをかいていたので、救急車で病院へ運び治療を受けたが4日後に死亡した。	○
j058		中1	男	部活	筋不全(大動脈解離)	柔道部活動中、本生徒は、武道場で立ち技練習中に大内刈りで投げられ、受け身をしたらとき腰部に痛みを訴えた。直ちに病院へ移送、治療を受けたが3日後に死亡した。	○	
j059		中1	男	部活	脳挫傷	柔道部活動で、部員13名は柔剣道場で練習を行った。当日は顧問教師が不在となるため、部長に練習メニューを指示した。準備体操、基本練習の後、約束練習として打ち込みと投げ込みを混ぜて、畳の上に敷いたマットで行った。このとき本生徒は、受け身を取り構えて背中から落ち、息を詰まらせて練習を2回中断した。その後しばらくして練習を再開した後、部員と組んで練習を繰り返したが、「気分が悪く、吐き気がする」と練習を中断し、ベンチで横たわった状態で倒れた。意識不明の状態では救急車で病院へ運び治療されたが、翌日死亡した。	○	
j060		高2	男	部活	頭部外傷による脳浮腫、急性硬膜下血腫	他校で行われた柔道部夏季合同合宿中、本生徒は乱取り練習で相手に体落としで投げられ、畳に右前頭部を強打し、仰向けに横転した。すぐ立ち上がり、顧問教師に頭を打ったことを報告後、体が倒れ落ち仰向けに倒れた。いききをかけ、けいれんが起きたので、救急車で病院へ運び治療を受けたが4日後に死亡した。	○	
j061		高3	男	授業	不明	体育授業中、道場で柔道の寝技乱取り中、本生徒は、相手に押さえ込まれ、10秒ほどはね返そうと手足を動かしていたが、15秒ぐらいいらばいきをかきようになった。相手はふざけているものと思い30秒までそのまま押さえていた。30秒過ぎたとき起き上がり、意識ももうろろとしているので、教師が蘇生を試みながら病院へ移送した。	○	
j062		高1	男	部活	高カリウム血症	夏季休業中に行われた3校合同の柔道部合宿中、興奮武道館で、午前、午後と引き続いて練習が行われた。午後3時半過ぎから行われた立ち技練習中、本生徒が体の不調を訴えたので休ませた。顧問教師が介抱中、次第に意識が薄れてきたので、救急車で大学病院救急センターへ移送し、手当を受けたが約3時間後に死亡した。	不明	
j063		高2	男	部活	筋繊維融解症、急性腎不全	柔道部合宿(8月8日から12日まで)時、本生徒は、3日目、早朝のマラソンで道場を歩行中、足が痛くなり休んでいるところを顧問教師の車に收容され、合宿所に戻った。手足のしびれを訴えたため病院へ移送、入院治療を受けたが翌日死亡した。	腎不全	
j064	1997 (平成9)	1995 (平成7)	中1	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、顧問教師指導の下練習を行い、乱取り中、本生徒は払い腰を掛けられ下になった状態となり倒れた。その後立ち上がったがふらふらと畳に倒れ意識を失った。顧問教師がこれに気づき救急車で病院に搬送され、4時間に及ぶ手術を受けたが成功したが、3日後に容体が急変し脳死状態となり受傷後5日後に死亡した。	○	
j065		高1	男	部活	急性脳腫瘍、硬膜下血腫	柔道部活動時、顧問教師と乱取り中、顧問教師が内股を掛けた際、巻き込み形となり、顧問教師が本生徒の上に乗る形となった。本生徒は、すぐに立ち上がりようとしたが、足に力が入らなげられるように倒れ意識不明となった。救急車で病院に搬送したが3日後に死亡した。	○	
j066	1998 (平成10)	1998 (平成8)	中1	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動中、1人が6人を投げた約束練習をしていた時、3年生部員が本生徒を相手にして大内刈りをして、一度後ろへ下がった後、前へ引き出して倒れている状態を確認して背負い投げをかけた。本生徒は体勢を立て直そうとしたが頭部から投げ込み用のマットの上から落ち、一度は立てたものの後ろへ振りかへたが、倒れるように倒れた。治療を受けた養護教諭が現場に直行し、けいれん、意識の状況を見て即座に救急車を手配し病院へ搬送後治療したが、翌日の方に死亡した。	○	
j067		高1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、準備運動をし、打ち込み等の練習後2年生との立ち技練習を行った。本生徒は相手に内股を2回と大内刈りを1回かけられたが、受身でかわしていた。はじめて1分過ぎたころ急に顔を抱えて走り込んだので担当教師の指示で柔道場のすみへ行き正座させたが、前に倒れ意識がはきりとした状態になったので救急車を手配し病院へ搬送し、手術を受けたが意識は戻らず8日後に死亡した。	○	
j068		高3	男	授業	防動脈血栓	体育授業での柔道の乱取り中、相手の体落としに対し投げられないよう踏ん張ったが右足首をねじるよう倒れたとき、2人が重なるように倒れたので重量がかかり右足首を骨折した。入院し手術を受け、右足首は関節に回復したが、発生から11日後に胸の苦しみを訴え病院で治療したが、その3日後に再度胸の苦しみを訴え救急車を呼んだが到着前に死亡した。	○	



j069		高2	男	授業	急性心不全	体育授業の柔道時、準備運動、受身など十分身体を温めた後グループ別の乱取りげい入に入った。本生徒の順番になり組み合ったまま場外に出そうになり、審判が「待て」の合図をかけたので2人が中央に戻ろうとしたとき、突然後ろ向きに倒れた。直ちに救急車で病院へ搬送したが、発生より約40分後に死亡した。	心不全	
j070		高3	男	部活	不詳	柔道部活動時、乱取り練習中、本生徒は寝ている様子で立っている状態が多かった。特に本人からの訴えはなかったが体調は優れないようであった。2時間半ほどで練習が終わったが、寝かされていたが父が練習呼び返家用で車中した。帰宅途中、あまり目も開かない状態で病院で受診したが、たまたまという形で帰宅した。翌日も容態が好転しないので同じ病院で診察を受けたが、入院の必要もないというので静養していたが、容態が急変し、その日の昼頃に死亡した。	不明	
j071		中2	男	部活	熱射病による多臓器不全	柔道部活動で他校3日間の夏期合宿を行ったとき、最終日の朝練習で準備体操後、野外走りやダッシュ等をほかの部員よりも軽めの距離や時間で行った。整理体操後、朝食と休憩になり本生徒はお茶を飲み朝食は取らずに休憩していた。しばらくして体調が悪化し、熱射病と診断された。救急が着のちに搬送された。けいれんを起こして昏睡状態になった。救急車を要請し、病院へ搬送し治療を行ったが翌日死亡した。	熱射病	
j072	1999 (平成11)	1997 (平成9)	高1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、本生徒は学校外武道館で東地区予選に参加し、軽量の試合に出場していた。相手と勝負しい投げをされ右前額部に裏に強打し、そのまま前方に仰向けに倒れた。起き上がったが、まなこがそのまま動かないように指示し、数分の間は意識も正常な状態であったがしびれに意識が戻らなくなり手足の硬直と発汗といった状況が見られるようになり救急車で病院へ移送し血腫除去の手術を受けたが30分後に心臓が停止し死亡した。	○
j073			高1	男	部活	脳ヘルニア	柔道部活動時、柔道場で授業練習中、本生徒は入目の相手に右足を刈られて受身を取って倒れた。立ち上がったとき、ふらついて反動で相手に逆り倒れた。直ちに倒れたが、練習に参加しようとして上体を動かしたので静止させたところ、けいれんし白顔になっていたのですぐに養護教諭を呼び、昏睡状態であったため、救急車で病院へ搬送し治療を行ったが脳死状態のまま、18日後に死亡した。	○
j074			高1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、準備運動後の乱取り中、2本目を終えたところで本生徒は気分不良、頭痛を訴え見学していたが、転倒し意識を失った。養護教諭が駆けつけたが、脈、呼吸はあるが意識がなく泡を吐いた状態であったので、直ちに救急車で病院へ移送された。急性硬膜下出血が認められ、脳死状態になり3時間後に死亡した。	○
j075			高1	男	部活	脳挫傷	柔道部活動時、昇段審査を受ける予定であったが、会場へ行くまで時間があつたので、本生徒はいつものように非常階段を昇り降りしての準備運動を行っていたが、昨日からの雨で階段や手すりが見えなくなり滑りやすくなり、転倒し意識を失った。養護教諭が駆けつけたが、脈、呼吸はあるが意識がなく泡を吐いた状態であったとと思われる。その後他の部員が非常階段下の通路で倒れている本生徒を発見し、救急車で病院へ搬送されたが4時間後に死亡した。	転落
j076			高1	女	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、柔道場で投げ込みの練習中、相手に大外刈りで投げられた際に受身を取ったが頭部を畳で強打した。一度は立ち上がったものの再び倒れ込んで意識不明となり、救急車で救急救命センターに搬送された一時容態に明るさが見えたものの、意識不明のまま11日後に死亡した。	○
j077			高1	男	授業	窒息	体育授業の柔道時、本生徒は、準備運動受身及び打込基本動作の後で2分間試合を行った。その後授業途中トイレへ行ったと思われるが、トイレ前の廊下に仰向けになって倒れていたのを発見された。すでに顔面蒼白で意識のない状態だったので救急車で病院へ搬送されたが3時間後に死亡した。	不明
j078			高3	男	授業	急性心不全	体育授業の柔道時、準備運動を行ってからの、受身の練習を行った。その後乱取りを行い、本生徒も参加したが終了後、寝かされていたので担当教諭が値しているところ腕にもたれてきたので、血と白い帯を巻いて寝かせた。授業終了のあいさつをして生徒に近づいてみると、呼吸が停止していたので心肺蘇生法を実施し、救急車で病院へ搬送されたが回復しないうちに2時間後に死亡した。	心不全
j079	2000 (平成12)	1998 (平成10)	高2	男	授業	心室細動	体育授業時、武道場で柔道を行っていた。準備運動を行い、受身の練習後、試合形式の練習に入るため注意事項を説明し、本生徒は模擬試合をさせた。教諭が試合中、説明しようとした際、突然しゃがみ込み左前方に倒れた。直ちに心臓マッサージ、気道確保しながら心肺蘇生を行った。救急車で病院に搬送したが、2時間後に死亡した。	心臓系
j080			中2	男	部活	熱中症による多臓器不全	柔道部活動時、他校武道場で合同練習をしていた。準備運動をして、寝技、投げ込みの練習後、乱取りの練習を始めた。本生徒は寝た様子なので、教諭が休憩するよう指示した。意識がもうろうとし始め、右手に硬直が見られたため、救急車を要請し病院に搬送し治療を受けたが、翌日死亡した。	熱中症
j081			中2	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、投げ込みで打ち込みの練習をしていた。本生徒は背負い投げの打ち込み練習を行い、続いて相手に大外刈りの打ち込みを行った。2回目に投げられた際、後頭部を畳に強打した。投げられた後、ゆっくり立ち上がったが、すぐに倒れた。養護教諭が軌道を確保の処置をし、救急車で病院へ搬送し処置を受けたが、4日後に死亡した。	○
j082			高1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動時、防カトレーニングを行い、その後、打ち込み練習、乱取り練習を行った。終了の礼をした直後に倒れ、顧問が抱き上げ呼吸、脈拍を確認したが、意識がなかった。直ちに救急車で病院に搬送し、緊急手術を行い治療を続けたが、1ヶ月後に死亡した。	○
j083			高1	女	部活	窒息	柔道部活動時、柔道場のインターバル練習中、生徒同士で「送り擁護」を行い、落ちたが蘇生し回復した。続いて監督が相手になり「崩れかけ固め」で押さえないが左腕を喉の上に乗せ、寝技を続ける練習をしていたが、本生徒の力が急に抜けたため顔をつたえながら、自もめさせようとしたときに、蘇生しなかったが、蘇生しなかったため、救急車で病院に搬送し治療を受けたが、2時間後に死亡した。	○
j084	2001 (平成13)	1999 または2000 (平成11) または12	中1	男	部活	心臓性突然死	柔道部の練習に参加し、準備体操・受身・打ち込み・乱取り・引き出し・整理体操を行い、練習終了後、柔道場の清掃を終え、本生徒は友人とぶつかり合いながら技のかけ合いをしていた。本生徒は相手に対し、後ろ向きになった時、背を押され、うつ伏せに倒れたところに、その上に倒れついた格好で相手の手に乗った。その時、他の生徒が本生徒の顔色が青くなっていることに気づき、すぐに病院よりよいい、本生徒に声をかけるが、反応がなかった。連絡を受けた教師が人工呼吸、心臓マッサージを行い、搬送された病院で死亡した。	心臓系
j085			中2	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部の活動中、本生徒が投げ技をかけられ、受身を取ったが勢い余って回転し転倒した。すぐに立ち上がったが、顧問が異常に気づき救急車を要請した。その後、搬送された病院で治療を受けたが死亡した。	○
j086			高3	女	部活	蘇生後脳症	柔道部の練習に参加中、午前中の練習を終え、昼休み後、他校の生徒及び社会人と合同で寝技の乱取り練習を行った本生徒は、8人目の対戦の隙に倒れた。倒れた後、14秒で意識が戻ったが、その後意識を失った。人工呼吸、心臓マッサージを行うとともに、病院に搬送され、治療を受けたが、意識不明のまま死亡した。	○
j087	2002 (平成14)	2001 (平成12)	高1	男	部活	熱中症	隣接校3校による柔道の合同練習中、通常の経路を自転車で行き、気分が悪くなり歩道まで倒れた。脱水症状をおこし死亡した。	熱中症
j088	2004 (平成16)	2002 (平成14)	中1	男	部活	急性硬膜下血腫	当日、13時から柔道部の練習を開始した。準備運動を行った後、組み手練習を計4回ほど行った。その後、14時からおんぶ歩き(道場内5周)、乱取り(2分間×5分)、投げ込み(2本×12セット)を行い、本生徒は休憩の後、再度14時50分頃から乱取りを開始した。本生徒は3回目と4回目の乱取りを行ったが、3回目の途中で対戦相手に足払いを受けた後、腰砕けとなり、横向きに倒れた。脱水症状だと思った指導者が近く近く、歯を食いしばって舌を巻いている状態で、意識を失っていた。すぐに気道確保を行い、救急車で搬送されたが意識が戻らなかった。人工呼吸器をつけてICUに搬送されたが、搬送後約22時間後に死亡した。	○
j089			高1	男	部活	急性硬膜下血腫	当日、柔道部の練習を柔道場で、乱取りを1時間行ったら、5分間休憩し給水をとってから、攻撃練習(2人を前に立たせ、たの生徒がかかってくる)を開始した。10分くらい経過した時、かかってくる際に急激に倒れた。本生徒が、突然倒れ意識を失った。直ちに風通しの良い入口側に移動し、舌根沈下防止のためタオルを集中し、両脇に水をあてて救急車の到着を待った。救急車で搬送されたが、搬送後約22時間後に死亡した。	○
j090			中2	男	部活	脳内出血	柔道部の練習に参加していた本生徒は、準備体操(20分)を行い、寝技・めめ技(2分間×2回)、寝技の乱取り(2分間×4回)の練習をした。リーグ戦方式により、各試合間に2分間の休憩を取りながら4試合を行った。休憩の後、紅白戦を行い、1番で試合に出るが、「始め」の合図で観戦中、反則負けとなり、試合を見学していた。見学中に手足のしびれを訴え、立ち上がったがすぐに倒れた。寝技、意識もはっきりしない状態であった。救急車を要請し、病院へ搬送した。集中治療室にて治療を行っていたが、3日後に死亡した。	○
j091			高1	男	部活	原性性ショック	本生徒は、校内での柔道部の合宿に参加していた。合宿3日目の特に変わった様子もなく、午後5時頃に練習を終了し、夕食、入浴を済ませ、午後9時40分頃寝たが、翌午前8時50分頃、隣に寝ていた生徒が、腹ばい状態で苦しうないびきをかいて本生徒に気づき、顧問教諭に報告した。救急車を要請し、医療機関に搬送されたが、心臓マッサージ等の効果も無く死亡した。	心臓系
j092			中2	男	部活	急性硬膜下血腫	当日、9時から他中学校との合同練習を開始した。10時21分頃から乱取り(3分×6本)が始まり、本生徒は他中学校の生徒との練習中、大外刈りで投げ出された際に対戦相手も倒れ込み、背中と頭部、腹部を打った。再度練習を開始したが、10時24分頃、再び同校の生徒と大外刈りで投げられ、背中と頭部を打ち、意識不明となった。指導教諭が冷たいタオルで頭部を冷やし、動かさないようにして様子を見たが、意識がはっきりしないため、保護者へ連絡した。救急車到着後、医療機関に搬送し、人工呼吸器をつけICUに搬送されたが、翌日脳死状態となり、発生後約4日後に死亡した。	○
j093	2004 (平成16)	2003 (平成15)	中1	女	部活	急性硬膜下血腫	柔道部の部活動練習中、本生徒は受身を取りそこね、高等部を畳に打ち付けて意識を失った。指導に当たっていた柔道部顧問が職員室に連絡し、養護教諭が現場に駆けつけたが、養護教諭は直ちに救急車を要請するよう職員室に連絡した。養護教諭が救急車に付き添って病院に搬送され、検査の後、緊急に手術を行い、その後、入院加療が継続されたが、発生から約1ヶ月後に死亡した。	○
j094			高1	男	部活	急性硬膜下血腫	柔道部活動で体操、ストレッチ、受身練習をした。その後2人組になって打ち込み50本等を行った。さらに他校生徒との乱取り練習で背負い投げをかけたが、発生から約1ヶ月後に死亡した。	○
j095			高1	男	部活	不詳	当日、午前9時から柔道部の練習を開始した。準備運動、補強運動に続いて、10時から乱取り練習が始まった。乱取りの始めは立ち技の練習で、その後は立ち技から寝技までの練習であった。約30分後に監督が乱取りに加わり、本生徒と組んだ。監督が6本目の乱取り稽古で本生徒を投げ、寝技に入った直後に本生徒の力が抜け、意識を失った。監督は寝技で落ちたものに反応がなく、心臓マッサージを行ったが、意識が回復しないので、剣道部の監督に応援を頼み、携帯電話で救急車を要請する一方、他の生徒2名に職員室に連絡し、救急車が到着し、酸素吸入、心臓マッサージなどの心肺蘇生を行ったが、意識は回復せず、その後医療機関に搬送されたが、約1時間40分後に死亡した。	技による事故だが死因は不明
j096			中3	男	部活	心室細動	当日、柔道部の練習を開始し、本生徒は、全体練習の前の自主練習で、ストレッチ体操を10分間、腕立て(伏せ)30回、腹筋20回、背筋20回をセットを行った。その後、高さ6mほどの天井から吊るしている筋力アップ用ロープの上まで登り、重床より1.5m辺りから飛び降りたあと、4.5歩歩いて重床に横になった。全体練習の時間になり、他の柔道部員が声を掛けられたが、心臓マッサージを受けたが、意識が回復しなかったため、救急車を要請し、人工呼吸、心臓マッサージを行った。その後、到着した救急車により医療機関に搬送され、集中治療室で手当を受けたが、発生の日亡に死亡した。	心臓系
j097	2005 (平成17)	2004 (平成16)	高2	女	授業	心臓系 突然死	体育の時間に、前半より30分、格技場を走り(5-7周)、ストレッチ(15秒×15セット)、回転運動、寝技の攻防(30秒×2)をした後、試合(本生徒は60kg以上のBグループ)を行った。本生徒は、他の生徒から掛けられた大外刈りを返し、相手に乗りかかるように倒れ、一本を取った。そのまま試合を終えて礼をした後、突然倒れ意識を失った。	心臓系
j098			高1	男	部活	熱中症	午前10時より柔道部の活動を行っており、準備体操、寝技、ミーティング、乱取り稽古をした後、12時50分ごろから打ち込み稽古を2人組で行った。12時55分ごろ監督が技の指導を行った際、他の方向を見て返答するなど様子がおかしかったため練習を中断し、水分を補給させ休ませた直後、痙攣が始まり心肺停止状態となった。	熱中症
j099	2006 (平成18)	2005 (平成17)	中1	男	部活	心臓系 突然死	柔道部合宿中、2日目、朝から練習を行い、「ふんどう」という勇言を何度かしていたが、午後5時ごろには、「インフルエンザのような気がする」と訴え、夕食後シャワーを浴び着替えた後、しばらくしてから意識を失う。救急車で病院へ搬送されたが、翌日死亡する。	心臓系
j100			中1	男	部活	頭部外傷	柔道部の活動中、相手選手のかけた技(大外刈り)で投げられた際、畳で後頭部を打った。その後、相手に礼をし、監督の話を聞いた後、自腹に戻ったとき、滑るようになり向きに倒れた。	○
j101			中3	男	部活	頭部外傷	柔道部活動中、サーキットトレーニングや準備運動を行った後、打ち込み、乱取り、投げ込み等を行った。水飲み場まで休憩を取っていた際、体調が悪くなり、休んでいたところ、急にいびきをきき始め意識不明に陥った。	○
j102			高2	男	授業	心臓系 突然死	柔道の授業中、相手生徒に足技で蹴られて倒れ、横四方固めで押さえた直後、数秒間抜け出そうとしたが、そのまま動かなくなった。救急車を要請し、医療機関に搬送されたが、約1時間40分後に死亡した。	心臓系

j103			高1	男	部活 頭部外傷	柔道の部活動に参加し、当日は蒸し暑く、普段より若干軽めの練習を行った。練習の様子については、特に変わったところはなく、むしろ普段より頑張っている顧問も、数名の生徒たちも感じていた。また、練習中は、顧問や生徒同士の会話でも、頭部を打撲したことや、異変は認知できなかった。練習後は、最後に部室を出た主将に「しばらく寝て帰る」と言って別れた。保護者から連絡を受けた担任が学校を捜索したところ、部室で亡くなっている本生徒が発見された。検視の結果は頭部打撲による右硬膜下出血であった。	不明
j104	2007 (平成19)	2008 (平成18)	高1	男	部活 頭部外傷	柔道の練習中、乱取りをしていたところ、頭部を畳に打ちつけた。休憩時間中に「頭が痛い」と顧問に訴えたため、頭部を打ったことを顧問が確認し、氷嚢で冷やしながら水を飲むように指示する。ペットボトルの水を飲むとしたが、飲めずに脱力、向横に横になった。直ちに救急車を要請し、搬送された病院で治療を受けたが、10日後に死亡した。	○
j105	読売新聞2008.08.06		高2	男	部活 熱中症による意識障害と多 臓器不全	県高校体育連盟主催の柔道の強化合宿に参加中、本生徒は熱中症で早朝練習後に倒れた。病院に運ばれたが、意識不明の状態が続いていた。同日午後1時過ぎに病院で死亡した。〔読売新聞〕大阪府版2008年8月6日付(朝刊)の記事内容から個人情報を取り除いて編集した。〕	熱中症
j106	朝日新聞2009.05.27 朝日新聞2009.05.28		中1	男	部活 頭部外傷	当日、午前9時から柔道部の練習を開始した。ランニングや柔軟体操、坐骨のけいこなどを1時間ほどしたあと、寝技、押さえ込みなどの指導と実戦練習に続き、午前11時ごろから、乱取りなどを開始。正午ごろの練習終了間際の上級生が本生徒に「強い蹴」という投げ技をかけて倒したところ、起き上がらなかった。部員やコーチが見たが、意識がなく、午前0時25分に救急車で病院に運ばれた。CT検査や手術を受けたが、意識は戻らなかった。〔朝日新聞〕青森県版2009年5月28日付(朝刊)の記事内容から個人情報を取り除いて編集した。〕	○
j107	朝日新聞2009.07.27		高2	男	部活 急性硬膜下血腫	本生徒は当日、午前10時からほかの部員3人と校内の柔道場で練習していた。途中、トイレで嘔吐していたため、校内の別の場所にいた顧問教師が駆けつけたが、すでに意識はなく、病院に搬送されたが翌日未明に死亡。本生徒は直前まで一人で受身の練習をしていた。他の部員は立ち技の練習をしていた。〔朝日新聞〕2009年7月27日付(朝刊)の記事内容から個人情報を取り除いて編集した。〕	○
j108	朝日新聞2009.07.31 朝日新聞2009.08.07 読売新聞2009.08.25		中1	男	部活 急性硬膜下血腫	当日、午後1時から柔道部の練習を開始した。寝技などの練習のあと、2人1組で互いに技をかけあう乱取りをはじめた。1年生が上級生と組み、1本2分で実施。その後、本生徒は男性講師と組み、練習。午後4時20分ごろ、本生徒は2～3回投げられた後、仰向けに倒れたまま動かなくなり、病院に搬送。意識不明の状態が続いたが、27日後に死亡した。〔朝日新聞〕滋賀県版2009年8月7日付(朝刊)の記事内容から個人情報を取り除いて編集した。〕	○

表3 剣道中の死亡事故

事例ID	『死亡・障害事例』年度 〔～年度版〕	事故発生年度	学年	性	体育/部活	死因	事故の概要	剣道固有の事故
k001	1985 (昭和60)	1983 (昭和58)	高1	男	部活	急性硬膜下血腫	剣道の内陣かかり稽古中。	○
k002	1986 (昭和61)	1984 (昭和59)	中1	男	部活	急性心不全	50mダッシュを行っていた。	心不全
k003			高1	女	部活	急性心不全	けいこ中。	心不全
k004			高2	男	部活	急性循環不全	けいこ中。	心臓系
k005	1987 (昭和62)	1985 (昭和60)	高2	男	部活	熱射病	〔練習中意識朦朧状態となる〕 夏季練習は、準備体操、素振り、切り返し、腕の切り返し、大きく基本打のかり稽古、技の稽古、かかり稽古、地稽古、五人連続のかり稽古の内容で行った。2回目の5人連続のかり稽古の際、途中4人目で意識がもうろうとした状態になったため、中止させ防具をはずし横にさせた。(この間2時間10分程度)救急車で病院へ移送し、治療を受けたが熱中症(熱射病)により多臓器不全及び重症感染症が併発し死亡した。	熱射病
k006	1989 (昭和64)	1986 (昭和61)	中2	男	部活	外傷性クモ膜下血腫	剣道部活動時、体育館で面取り練習中、相手生徒と向かい合って面打ちをしている際、相手生徒の竹刀が破損し、面防具の間をとり眼に刺さった。	○
k007	1990 (平成2)	1988 (昭和63)	高2	男	部活	急性硬膜下血腫	剣道部活動中、顧問教師と互格けいこをやっていた最後の一本がなかなか決まらず数十秒して体当たりし、体勢を崩して、起き上がろうとしたが起き上がれず、数秒間泣いており、顧問が近よると急に泣きやみ体を硬直、呼びかけなどにも反応を示さなくなった。応急処置を行い救急車で病院へ移送、9日後死亡。	○
k008			高2	男	部活	溺死	剣道部活動時、チームワーク作りのトレーニングを川の流れでバレーボールを使って実施中、ボールが風の影響で思わぬ方向に行き下流に流された。本生徒は、他2名と急いでボールを取りに行き途中でおぼれ、その場にいた生徒が潜って捜すが見つからず1時間後遺体で発見された。	溺死
k009	1991 (平成3)	1989 (平成1)	高1	男	部活	急性心不全	剣道部の活動中、基礎トレーニングのスクワット中、他の生徒が持っていた長さ40cmの小木刀が、本生徒のほかまか背骨に当たり、骨に落ち割れる前に、その先端が腰を下した本生徒の腎部(右門の少し右)に突き刺さった。応急処置を行い様子を見て病院に連れて行ったが、傷が深(直腸穿孔)で入院、手術を受け経過は良好であったが、8日後「ウーツ」となり声を上げチアノーゼ出現、下咽呼吸となり、医師が蘇生術を施したが死亡した。(解剖所見)死因不詳、急性心不全による死亡の可能性が否定できない。	心不全
k010			高1	男	部活	急性心機能不全の疑い	剣道部の活動中、開始約1時間20分後、面打ちの追い込み技に入ってもなく、突然手足が定まらなくなり「しんどい」と転倒、真通しの良いところに寝かせ、約38分間休養し練習に復帰、互格けいこを約4分経過したとき再び前のりに相手生徒に倒れかかり、次第に意識を失った。応急処置を行い、救急車で病院へ移送したが死亡した。(解剖所見)心臓左室壁太475μ、右室拡張、心外膜・内臓下出血、脳硬膜下出血、脳硬膜下出血認めず。	心不全
k011			高2	男	部活	急性心不全	剣道部の活動中、準備運動の後、基礎練習をみっちり1時間行ったら、30分休憩をとった。練習再開後、地稽古を20分くらい行い、順番で教師から直接面打ちの指導が行われたが、本生徒は急に元気がなくなり上段の構えもおぼつかない感じだったので、教師から休むように言われ四つばいになり休んでいたが、練習終了の間際には横で構えついていた。練習が終わる直前に教師が本生徒の様子を見ると、目がうつろで意識が不明になっており、救急車で病院へ移送、手当てを受け、転院し治療を受けたが死亡した。	心不全
k012	1992 (平成4)	1990 (平成2)	中2	男	部活	心不全、その原因QT延長症候群	剣道部活動時-準備運動、面をつけて基本打ち、かかりけいこを行い15分間休憩した。その後、紅白試合を行い本生徒は第1試合に出場中、苦しそうな表情をしてその場に倒れた。直ちに防具をはずし、意識なく胸も感じられなかったのに、意識を回復し、心臓マッサージを行い、救急車で病院へ移送したが意識不明のまま41日目に死亡した。(既往症)QT延長症候群(1/4)、心臓病管理指導表(S. 61. 7.)	既往症(心不全)
k013			高3	男	部活	急性心不全	剣道部練習時、技を仕掛けたとき勢い余って転倒した。すぐ立ち上がり30秒ほど練習を続けたが、気分が悪くなり、道場の隅にうずくまり、そのまま意識不明となった。救急隊により心臓マッサージを行い、医師に注射を依頼し処置を行い、病院へ移送したが死亡した。	心不全
k014			中2	男	部活	熱中症による急性心不全	夏休みの剣道部活動時、準備運動、基礎練習、互格けいこ、掛りけいこ、基本練習、そして最後の切り返し練習のときに、本生徒がフラフラしているのに上級生が気づき、休むように声を掛け、体育館入口まで行ったところ倒れ込んだ。顧問が面を取って休むように指示し横にして休ませた。全員で座らしたあと声を掛けたく、濡れたタオルで冷やし、救急車で病院へ移送したが8時間後死亡した。	熱中症
k015			高2	男	部活	熱射病	剣道部活動時、練習状況より30分短縮し終了した直後、本生徒が倒れ顔や体を冷やし、救急車で病院へ移送し、経過良好と見えたが、2日後急変し、死亡した。	熱射病
k016			中1	男	部活	硬膜動脈瘤	剣道部活動時、準備運動後、面をつけて切り返して10分間行い、更に面打ちを10分間ほど行った。本生徒は、気分不良を訴えたので武道場の床に横になって休ませたが、30分ほどして様子がおかしくなり、よだれをたらして意識不明になっていたため、救急車で病院へ移送したが死亡した。	○
k017	1993 (平成5)	1991 (平成3)	高1	男	部活	溺死	剣道部の合宿3日目の練習終了直前にふらふらになり082人が抱えて滑り場所へ移動させた。かなりの猛暑であり疲労と熱射病の脱水症状と重なったと考えられる。休んでいるうちに突然立ち上がりリレーボールボールラックを上り下りしたところOBが外へ連れて行き前庭へ水を掛けた。その後ふらふらと畑の方へ歩き出し倒れて転がった。抱き起こして連れて行くところと手を払い歩き出す。声を掛けるとはつきりと答えたが、走り出し壁にぶつかり方向を変え杉林に向かって全力で走り去った。OBが追いかけて見つけた。杉林の先は断崖となっており川が流れていて、そこに転落した模様である。	溺死
k018	1998 (平成10)	1996 (平成8)	高3	男	部活	熱中症	試験明け休みの剣道部活動中、10時30分より練習を開始し、夏休みを1時間半と午後15分の休憩を取り約40分まで練習をした。5時40分からは顧問教師がけいこや大会について話をしていた。7時に練習を再開し、掛りけいこから1本勝負になり3人目と対戦中、突然具合が悪そうになり倒れた。意識を回復してうずくまった。姿勢を立て直すのも無理なようだったので横になって休むよう顧問が指示した。それから10分後に練習を終了し本生徒の様子を見たところ、意識等に異常が見られなかったため公用車へ搬送し治療をしたが約18時間後に死亡した。	熱中症
k019	1999 (平成11)	1997 (平成9)	高2	男	部活	血栓性血小板減少性紫斑病、敗血症	剣道部活動の5日間に渡る剣道大会時、本生徒は14日目で試合に参加していたが、5日目の朝に風邪のような症状を訴え試合を休み見学していた。補給中に容態が悪化し緊急入院したが翌日に死亡した。診療担当医師によると疲労の蓄積と足のむくみや痛みから病原菌が侵入し、敗血症が起り状態が悪化したといことである。	疲労等
k020	2000 (平成12)	1998 (平成10)	中2	女	部活	心臓停止	剣道部活動の真中学生剣道強化合宿に参加していた。合宿の最終日、練習前の運動としてジョギングを行った後、ウォーキングに移行した際、本生徒が「気分が悪い」と訴え、涼しい場所へ移動しようとした時、気が失って倒れた。けいこ状態だったため、直ちに救急車で病院へ搬送したが、2時間後に死亡した。	心臓停止
k021			高2	男	部活	急性心不全	剣道部活動時、終了のあいさつをしたようにした。突然、右のめき膝をついて前に倒れた。他の部員が直ちに面と胸を外したところ、口から泡をふき、呼吸と心臓の動きがなくなったので、直ちに心肺蘇生を行い、救急車で病院へ搬送し治療を受けたが、5か月後に死亡した。	心不全
k022			中2	男	部活	熱中症	剣道部活動時、練習中、本生徒が外に出て武道館前で気分が悪そうにしゃべっているところを練習員に立ち会っていた保護者が見つけた。武道館に運び入れ、着衣を締め、顔を冷やすなど応急手当をしたが、意識が朦朧としてきたため、救急車を要請し病院へ搬送したが、翌日死亡した。	熱中症
k023	2004 (平成16)	2002 (平成14)	高1	男	部活	脳内出血	当日、剣道場にて、9時30分ごろより準備運動をして素振りを行った後、本生徒が頭痛を訴え、剣道場の水道に顔を洗いに行った。他の生徒が準備運動を終え、水道付近に行こうとしたところ倒れている本生徒を発見したが、本生徒の意識は強く吐瀉物が見られた。顧問及び養護教諭に連絡し、救急車を要請した。搬送された医療機関にて入院、手術を行い、その後加療を続けたが死亡した。	不明
k024			高2	男	部活	熱中症	本生徒は、8時半に格技場に集合し、剣道部の部活動を行った。準備運動、素振り200本の後、練習に入り、夏休み最後の学校の練習ということで、特に気合いを入れて練習を行った。11時に10分休憩を入れた後、試合形式の練習に入ったが、本生徒はけいこで倒れた様子で、ふらふらになり倒れこんで倒れていた。意識が朦朧としていた。面をはずし、顔を冷やして練習を続けた。保健室の構えで、水を与えたり扇風機をあてたりして休養-経過観察をしていたが、その後、意識レベルの低下、失禁などが見られたため救急車を要請した。救急車で医療機関に搬送し、人工透析などを扱ったが、同日死亡した。	熱中症
k025	2004 (平成16)	2003 (平成15)	高2	男	部活	熱中症(急性循環不全)	練習を開始して2時間経ったところ、本生徒は倒れた様子で、ふらふらになり倒れこんで倒れていた。意識がもうろうとしていたため、練習場の横で休ませ、経過観察をしていたが、その後、意識レベルの低下が見られたため、救急車を要請し、医療機関に搬送した。	不明
k026	2006 (平成18)	2006 (平成17)	高1	男	部活	心臓系 突然死	剣道部の活動中、午前8時ごろから正午まで、約1時間20分に15分の休憩を取りながら、素振り、切り替えし、面家、懸かり稽古などの練習を行った。清掃、後片付けの後、夏休みの練習中、準備運動の後、互格けいこを再開した。互格けいこ中、互格けいこで倒れこんで倒れていた。意識が朦朧としていた。面をはずし、顔を冷やして練習を続けた。保健室の構えで、水を与えたり扇風機をあてたりして休養-経過観察をしていたが、その後、意識レベルの低下、失禁などが見られたため救急車を要請した。救急車で医療機関に搬送し、人工透析などを扱ったが、同日死亡した。	心臓系
k027			高2	男	部活	心臓系 突然死	他校体育館で、各回合宿中、本生徒が立ち上がり打ち合いを開始して約20秒後、突然、自分から前のめりに倒れこんだ。直後、一度顔を上げたが、再びうつぶせになった。	心臓系
k028			中2	男	部活	内臓損傷	剣道部の活動中、顧問の指示のもと、神社の階段を利用してトレーニングをしていた。ふざけて右打撃にまじまじと構えていたところ、本生徒の右腕が、互格の一歩が倒れてきて胸を直撃した。	その他
k029	2008 (平成20)	2007 (平成19)	高1	男	部活	中枢神経系 突然死	準備運動から開始し、途中で休憩、水分補給を5回入れながら、防具を着用して練習を始めた。稽古の5本目の途中に目の奥が痛いという稽古をやめて顧問のところへ行き、頭痛とめまいを訴えた。横にして休ませ本人に状況を確認したところ、意識もあり、問いかけに対する応答もできてきた。意識は朦朧と戻ってきた。養護教諭に連絡し、保健室に運び様子を見ていたが状態が悪化したため、救急車を呼び病院へ搬送したが死亡した。	不明
k030	読売新聞2009.08.19		高1	男	部活	熱中症	剣道部合宿の練習を終えた直後に意識を失い、搬送先の病院で翌日未明、死亡した。熱中症が原因と見られる。当日は、午後2時頃から防具を付けて本生徒は、ほかの部員らとけいこを行っていた。(読売新聞)茨城県東茨城郡2009年8月9日(朝刊)の記事内容から個人情報を取り除いて編集した。	熱中症
k031	読売新聞2009.08.23		高2	男	部活	熱中症	午前9時頃から、本生徒はほかの部員7人と道場で練習を始め、顧問と顧問の教師2人の指導を受けていた。練習は休憩を含めながら練習、途中で突然倒れた。教師らが防具を外し、顔を水で冷やすなどの処置をしたが、意識はもうろうとしたままだった。部活の練習中に倒れ、約7時間後に死亡した。(読売新聞)西部版2009年8月23日(朝刊)の記事内容から個人情報を取り除いて編集した。	熱中症